

## 椎の本花叔編『雲陽人物誌』にみられる自伝的部分の意義

山崎 真 克

(比治山大学)

### 摘 要

先に私家版として翻刻出版した椎の本花叔編『雲陽人物誌』にみられる自伝的部分の意義を考察した。他国の有力俳人との親密な交流を示すのは、自分が『雲陽人物誌』に採録される人物としても、編者としてもふさわしい人物であるとの自負を抱いていたためではないか。とするならば、自伝的部分は本書全体の跋文に相当すると同時に、自己の歩みを書き残したいという欲求が、本書成立の大きな要因となっていたことを示す内容であると考えられる。

キーワード・出雲文化圏 椎の本花叔 雲陽人物誌 出雲歌壇 データベース

### はじめに

稿者は、江戸後期に多く刊行された類題和歌集における出雲歌人の入集状況を整理した上で、附載された作者姓名録などの情報に基づき、出雲歌壇を構成する人物データベースの構築に取り組んでいる。歌壇の全体像を把握するためには、個別の資料についての分析とともに、歌壇を構成する歌人たちの人物情報や歌人同士の交流の実態を明らかにすることが不可欠だと考えるためである。

これに加えて、和歌に関する事蹟だけでなく、俳諧その他の文芸活動に携わった個別の人物・資料についての分析を進める必要がある。それは、和歌・俳諧双方に関わるような複層的な営みこそが当時の実態であり、出雲歌壇のみならず「出雲文化圏」の解明につながるからである。

そこで注目したのが、出雲国神門郡(現島根県出雲市下古志町)比布智神社の神職で、俳人としての事蹟が残る椎の本花叔(春日盈重)である。花叔は、文政六年(一八二三)、出雲国に関わる文化人についての情報をまとめ、『雲陽人物誌』(乾坤二冊、島根県立図書館蔵)を著した。この資料には、和歌・俳諧・漢詩・書・画・茶事・囲碁ほ

か、多岐にわたる分野で功績のあった人物が採録されている。

先に稿者は、編者花叔の自筆草稿本である島根県立図書館蔵『雲陽人物誌』の全文翻刻を行い、私家版として活字化を図った。該本は、比布智神社から島根県立図書館に寄託された資料の一つである。また、転写本二本を加えた諸本の書誌と、人物項目の採録方針について考察し、〔解説〕として附載した<sup>①</sup>（以下、前稿とする）。

本稿では、これまでの考察をふまえた上で、『雲陽人物誌』坤にみられる花叔の自伝的部分を取り上げる。下冊にあたる「坤」全二二丁のうち、一二丁表―一七丁裏の六丁分を占めるこの部分は、上冊にあたる「乾」をあわせて二六一名分が採録される人物情報の中で、極めて異例の長さを持つ。また、他の人物と同様に「氏・名・通称・号」「血縁関係」を述べた上で、幼年期からの囲碁・俳諧の学び、諸士との交遊、諸国遊歴の有様を語り、五十歳の春を迎えた故郷での現在の生活をふまえて、「是までの行状のうる覚へなるをところ飛はしに書と、めて忘れなん後の便と思ふのみ」と記す。こうした配列や内容の分析・整理を通して、本書における花叔の自伝的部分の意義を明らかにすることを本稿の目的とする。

### 一 『雲陽人物誌』の人物情報の配列

前稿では、『雲陽人物誌』に採録された人物情報を項目ごとに分類整理し、掲出の際の文言の例とともに以下のように示した。

- ・氏・別称・名・通称・号・字
- ・生存時期：「〓年中の人」「〓に卒す」など

・身分：「松府之家臣」「〓の住職」など

・所在地・出身地：「〓の人」「〓の産」など

・功績のあった分野：「〓を能す」「〓に名あり」「〓に名を得たり」「〓に名高し」「〓に長せり」「〓を好む」「〓をたのしむ」「〓を愛す」など

・師弟関係：「〓の門人」「〓を師とす」など

・血縁関係：「〓の男」「〓の子」など

・他出文献：「〓に曰」「〓にのせたりなど」

・著作：「著述」

※「説話」と記して、その人物の特徴的な逸話を紹介する場合もある。

また、配列に関しては、「血縁関係」や「身分」によってまとめて配列された群が一部にはあるものの、「生存時期」「所在地・出身地」「功績のあった分野」などの項目ごとに体系的に掲出しているわけではない。序文に「年暦生死をもわかつた、うち聞まゝを混して記し侍れは」とある通りである。

今回改めて注目したのは、乾（全三四丁）、坤（全二二丁）それぞれの末尾近くに、丁の途中が空白となる部分があることである。

・乾三三丁裏：約十行分空白。

乾三三丁表から乾末尾まで、「紀重」（花叔の父）、「易重」（花叔の兄）、「庸重」（花叔の甥）という春日家三代の人物が続く。

・坤二二丁裏：約七行分空白。

一二丁表から一七丁裏まで、「花叔」の自伝的部分が続く。

・坤一七丁裏：約五行分空白。

一八丁表から坤末尾まで、「國守治郷君」以降の松平家や、出雲大社国造の千家家・北嶋家、日御碕校などの人物が続く。

いずれの箇所も、空白をおいて次の丁の冒頭から改めて書き起している。花叔自身を含めた春日家の人物や、松平家や出雲大社国造家などの貴人についての情報が、この部分以外の人物の配列にはみられないようなまとまりをもって示される。乾・坤それぞれの末尾近くにあることから、本書執筆の当初より、あらかじめこの位置にこれらの人物を置くことを意図していたとは考えにくい。

島根県立図書館蔵本が、少なくとも二段階の加筆・修正の跡がみられる花叔の自筆草稿本であることを勘案すると、あくまで推測の域を出ないものの、ひとまず出雲国に関わる文化人についての情報の執筆を終えた後、余白となっていた部分に、春日家の人物や貴人についての情報を追補したのではないかと考えられる。

こうした箇所に配列された自伝的部分はいかなる構成および内容を有するのか、次節以降にて分析する。

## 二 自伝的部分の構成

『雲陽人物誌』坤一二丁表～一七丁裏の六丁分を占める花叔の自伝

椎の本花叔編『雲陽人物誌』にみられる自伝的部分の意義（山崎真克）

的部分は、以下に示すように内容的に大きく三つに分けられる。

A 基本的な人物情報：氏・通称・血縁関係・幼名・実名・俳号・号

B 「説話」：幼年時から現在に至るまでの経歴

- ① 幼年時、獅子門の俳諧を学ぶ。
- ② 故郷を離れ、江戸に上り囲碁を学ぶも、途中で断念する。
- ③ 江戸で蕉門雪中庵に俳諧を学ぶも、途中で断念する。
- ④ 諸国を巡った後に、信濃国善光寺において再び俳諧を学ぶ。
- ⑤ 信州飯田に赴き、名古屋の井上士朗に入門して俳諧を学ぶ。
- ⑥ 諸国を行脚して交流を図るが、兄からの消息を契機に帰国の途につく。
- ⑦ 木曾・名古屋・伊勢・浪花などを経て、父の死後に帰国する。
- ⑧ 旧知との交遊が懐かしく、飯田他の各地を旅する。
- ⑨ 故郷に庵をむすび、旅に明け暮れる生活をやめて、これまでの行いを書き記す。

C 「附録」：花叔自身の著作（二種の紀行文）についての言及

Aの部分には、他の人物の場合にも記されるような基本的な人物情報の項目がみられる。B・Cの部分は、それぞれのまとまりの冒頭に、やや薄い墨書によって「説話」「附録」と小字にて書き入れられている。またBの部分のみ、他より一字分上げて記されている。幼年時から現在に至るまでの経歴が書かれたBの部分、内容によりさらに①～⑨に分け、概略を示した。

三 自伝的部分の内容

では、前節での区分にしたがって、自伝的部分の本文を示し、<sup>③</sup> それぞれの内容について分析を行う。なお、本文中にみられる俳人その他の人物や出典については、『俳文学大事典』『国書人名辞典』等に基づいて注記を加えている（注記を付したものは破線を施した）。

『雲陽人物誌』坤一二丁表～一七丁裏 248 花叔項

248 A ○花叔

氏<sup>ハ</sup>春日、通称半蔵、比布智之社司<sup>紀重</sup>之八男也。幼名直之助、実名盈重、始誹号己千、後花叔、号橘隠、又権の本、又信州飯田<sup>ニ</sup>ありては古志庵ト云。

・紀重：春日延重の男。式部・藤枝と称す。廣瀬百蘿・中島魚坊・山本厚道らと交友があった。享和二年（一八〇二）四月三日卒。七十九歳。（『雲陽人物誌』173）

・忍ふ庵魚坊：中島魚坊。天領安濃郷大田南村（現島根県大田市）生まれの俳諧師。美濃派の獅子門第四世田中五竹坊に師事。（『雲陽人物誌』58）  
・獅子門：獅子庵と名乗った美濃派の各務支考の門下を指す。

② 故郷を離れ、江戸に上り囲碁を学ぶも、途中で断念する。

十七歳のとし、濃州の服部<sup>因徹</sup>（<sup>始五段ノ後</sup>上手二段）に來ル。則師として囲碁を学フ。然るに、山本<sup>又</sup>閑翁のすゝめによりて、此年の冬、因徹に随ひ、自国を發し、因州鳥取に年を越え、翌年の春、江都に至ル。井上<sup>因碩</sup>（<sup>六代目也</sup>因達と）の門人となりて、同家に偶居し、囲碁を学ふ事一とせ余り。然れども、元來微力鈍才にして、上達を遂されは、むなしくも囲碁の修学を捨たり。

・服部因徹：囲碁棋士。美濃の人。のち因淑と号す。七世井上春達因碩の門人。  
・山本又閑：山本厚道。神門郡知井宮の人。廣瀬百蘿の門人。（『雲陽人物誌』102）  
・井上因碩：囲碁棋士。八世井上因達因碩。安芸の人。

B

① 幼年時、獅子門の俳諧を学ぶ。

花叔<sup>幼少</sup>幼年の時、忍<sup>ハ</sup>ふ庵魚坊の門下に遊ひて、獅子門<sup>ハ</sup>之俳諧を学ふ。

③ 江戸で蕉門雪中庵に俳諧を学ぶも、途中で断念する。

それより芝増上寺に奉仕する事数年、そかに誹家雪<sup>中庵</sup>（<sup>一〇二</sup>）にたよりて、風雅<sup>ヲ</sup>を学フ。師は蕉流の一家にして、獅子門の俳風と

ハ黑白のたかひにて、中に獅門の垢の焦付たる己れ、蕉門の意味の暁りかたきを愁ひて、又此道をも捨果たり。

・雪中庵：俳諧師。服部嵐雪の道統を継ぐ四世雪中庵完来。三世蓼太の門人。

④ 諸国を巡った後に、信濃国善光寺において再び俳諧を学ぶ。

いよ／＼雲水の身の上となりて、姓名を隠し、仮に梁川金次と名乗、安房・常陸・上総・下総・上野・下野などの國々に遊ぶ。こゝに上州草津の温泉におゐて、信州善光寺なる希言といへる人に巡り逢ぬ。いかなる因縁ありてや、其親しミ旧友の如し。此人蕉門の俳諧をしきりに進む。我又風雅の志を發して、ともに信濃國に至り、善光寺再び俳諧に風雅を学ぶ。

・希言：俳諧師。本名、岩下平兵衛親利。信濃国善光寺大門町の菓種商。士朗の門人。

⑤ 信州飯田に赴き、名古屋の井上士朗に入門して俳諧を学ぶ。

于時同國飯田なる八巢蕉雨と云人に出逢、懇切の交はりに日を重ねつゝ、希言も共に掌を合せて、終に飯府に至ル。蕉雨の師、尾州の名古屋琵琶園士朗の門人になさん事をひたすらに進む。よて尾張に趣き朱樹翁の先生の門下となる。此時、先生ハ千を廢して、

椎の本花叔編『雲陽人物誌』にみられる自伝的部分の意義（山崎真克）

花叔に改め替たり。号を橘隱となす。是より身を飯田にありて、折／＼先生を訪らひ、風雅を修学す。

・八巢蕉雨：俳諧師。本名、桜井光喜。別号、八巢、槿堂。信濃国飯田の豪商。士朗の門人。

・琵琶園士朗・朱樹翁：俳諧師。本名、井上正春。通称、専庵。のち松翁。別号、枇杷園・朱樹叟。暁台の門人。

⑥ 諸国を行脚して交流を図るが、兄からの消息を契機に帰国の途につく。

扱、飯府の連社、叔か故國の在名にもとつき、庵所を作りて住しむ。或ハ囲碁を樂しみ、風雅にあそふ事、四とせ斗り、甲斐の國に至りてハ、雪亭可都里を師のことくに仕へて、誹道を学ぶ。北國行脚には、飛驒・越中・越後・會津などの國／＼を漂泊し、佐渡の國へも渡りて、此島に凡半年斗り杖をとめ、飯田の古志庵に立歸るに、故國の兄信風よりせうそこして、文中示しの一句を記し、頻に帰國をうなかず。此雁便を得て、故郷さすかにも忘しかたく、且は父母兄弟親友の誰かれも床しければ、道祖神にゑり髪を引立られ、古郷へ歸路の旅にうかれ出たり。

・雪亭可都里：俳諧師。五味氏。甲斐國の豪農。關更の門人。文化／＼文政期の甲斐俳壇の雄。

・信風：春日紀重の嫡男。実名易重。『訂正出雲風土記密勘』、隨筆『見聞愚抄』

椎の本花叔編『雲陽人物誌』にみられる自伝的部分の意義（山崎真克）

一八

などの著作がある。文化七年（一八一〇）七月十七日卒。五十九歳。（『雲陽人物誌』174）

⑦ 木曾・名古屋・伊勢・浪花などを経て、父の死後に帰国する。

先づ木曾に親しき知音の侍れは、是を尋ねて、共に濃州に至りて別れをなし、名城におもむき、朱樹師に帰國を告る。師も哀とや思はれけん、連句一順を催し、自らの句も書付て、餞別せられたり。かくて伊勢の國に立越え、木神宮を札押し、古市の椿堂、山田の芒庵に杖を休め、終に都に登る。浪花の連衆にそゝのかされて、又浪花に下り、日を重さぬ。それよりいそぎ帰國せしに、此時はや父は没して、千悔の涙をふるふ。

・椿堂…俳諧師。本名、徳田長兵衛時生。伊勢国古市の人。士朗の門人。  
・芒庵…未詳。

⑧ 旧知との交遊が懐かしく、飯田他の各地を旅する。

かれ是と日を過すに、飯府の古志庵もなつかしく、立帰る思ひ有しか、実母さへぎつてと、む。兄弟親友の人々も、母に同心して袖を引。こゝに水魚の友、山本一釣翁、深き情ありて、二つ全き謀をからかへ、叔か身の行末を懇にはかりて、大社の配札且勤といふことを、廣瀬何かしに話して、和泉・三河の兩國の且場を

巡る事をこしらへ、花叔に与へて曰、とし比親しき國々に至り、風雅を修行なし、あるは且場をかたらひふやし、行末の身の納りをやり、半年は旅に、其半は自國にあそひなんも又樂しからすやと。この示しに随ひてより、年々浪花・和泉を且廻し、誹家にたより、あるは洛に登り、旧誹と交はり、江勢兩國の親誹を尋て、尾張・三河に日を重つ、又信濃へ立越え、飯府の親友に逢て、心のまゝに風雅の修学を遂しは、全く一釣翁の深き志より起れり。

・山本一釣…山本又閑の男。（『雲陽人物誌』103）

・廣瀬何かし…未詳。廣瀬家の春信（百羅）、『雲陽人物誌』55、浦安（百羅）の男、『雲陽人物誌』56、楚川（浦安）の男、『雲陽人物誌』57）のいずれかか。

⑨ 故郷に庵をむすび、旅に明け暮れる生活をやめて、これまでの行いを書き記す。

さて、いつ迄漂流の身の上も便あらじと、親友誰その進めに任せて、古志の里に一庵をむすふ。此地に椎の古木あり。祖翁の「先頼む」との玉ひし木の本を便りに、庵名も則椎のもと、号で。此草庵にうつりて六とせ七とせか程も、かはらぬ旅に笠を古せしが、故ありて且廻をやめ侍りぬ。又老の浪も立かさなれば、永くうき旅路に苦しまんもよしなして、親しき人々の情厚くと、めらるゝに、我も病身常に倦て、おほつかなく思ひ侍れば、旅の念をたちて、一圓椎の木陰に老を養ひ、知音を便に生界を送るの外、

他事なし。于時文政六つ末のとし、花叔五十年の春を迎へて、是までの行状うろ覚え、どころ飛はしに覚へなるを書と、めて、忘れなん後にの便と思ふのみ。

・「先頼む」：『猿蓑』巻六「幻住庵記」にみえる芭蕉の句「先たのむ椎の木も有夏木立」。

## C

附録 飯田より帰國する年、遠州の山本源吉を招きて、飯府【(に)其外、信濃の國所々にて碁會せし事、又山本一釣翁と諸國遊歴せし一条、其後釣翁の【(嫡)世】子、鶴寿に誘はれて、同し旅をなし、神社仏閣旧跡など経めぐりし事、都て是までのありさま、書【(もら)落】す事の至て多し。只是に記すは百ヶ一なるへし。(約五行分空白)

・山本源吉：囲碁棋士。遠江国浜松の人。  
・鶴寿：山本一釣の男。(『雲陽人物誌』104)

Aの部分には、基本的な人物情報として、氏・通称・血縁関係・幼名・実名・俳号・号が記されている。前稿でもふれたが、花叔について述べたもので最も早いのは、管見に入る限り桑原規草氏『出雲俳句史』(昭和12・9)である。但し、『雲陽人物誌』の花叔の自伝的部分を勘案すると、記述の中には訂正すべき点も含まれる。桑原氏は花叔を「春日易金の三男」(『国書人名辞典』では「易全」とする)とする

椎の本花叔編『雲陽人物誌』にみられる自伝的部分の意義(山崎真克)

が、昭和六年に編纂された春日清編『縣社比布智神社史』に記された春日家の系譜には「易金(全)」なる人物は見出せず、他資料でも確認することができない。桑原氏は、著作中に『雲陽人物誌』本文を引用されており、その存在にも言及されているが、引用本文が島根県立図書館蔵本と異なる場合があるため、桑原氏が披見された本が島根県立図書館蔵本とは別のものの可能性もある。桑原氏の記述の根拠は不明であるものの、花叔の血縁関係としては「紀重の八男」と訂すべきである。

Bの部分は、①幼年時に中島魚坊に入門して俳諧を学んだことから書き起こし、②囲碁の服部因徹・井上因碩、③俳諧の雪中庵といった師と仰いだ人物などを具体的に示しながら、これまでの学びと挫折の歩みを記述する。さらに諸國遍歴の後、⑤井上士朗に入門し、門下を中心とした俳人たちと盛んな交遊を重ねたことを、具体的人名を示しながら述べている。

⑧帰国後も各地を旅して、俳諧を通じた交流を続けたことを述べる。そして⑨旅に明け暮れる生活をやめ、五十歳の春を迎えた故郷での現在の生活をふまえて、「是までの行状のうろ覚えなるをとこころ飛はしに書と、めて、忘れなん後の便と思ふのみ」(修正本文)と記す。

「附録」とするCの部分は、⑦の帰国の旅について記した享和元年(一八〇一)もしくは同二年(一八〇二)『俗記 橘隠独行記』、および⑧の諸國遊歴の旅を記した享和三年(一八〇三)『癸亥記行』という、花叔著作の二種の紀行文の存在への言及である。これらの著作の内容、および旅中での交遊の実態は、別稿にて詳細に検討する予定である。

Bの部分において、挫折した体験も含め、師と仰いだ有力な人物名を明記し、さらに現在は出雲国在住ながら他国の有力な俳人とも親密

な交流を保ち続けてきた経歴を示すのは、自分が『雲陽人物誌』に採録されるにふさわしい文化人であるとの自負を抱いていたためではないか。芭蕉の句をふまえた「椎の本」という庵名からも、そうした意識がうかがえる。

また、そうした自分だからこそ、広く出雲国ゆかりの人物を採録した本書を編纂するにふさわしいという意識があったとも思われる。とするならば、自伝的部分は単に自身の経歴を振り返るだけの意味を持つのではなく、編者たる資格を持つ自身を規定することで、本書全体の跋文に相当する性格を有すると言える。

と同時に、前述した「是まての行状のうろ覚へなるをところ飛はしに書と、めて、忘れなん後の便と思ふのみ」という自己の歩みを書き残したいという欲求が、『雲陽人物誌』自体の成立の大きな要因となっていたことを示す内容であると考えられる。

そうすると、第一節ではひとまず出雲国に関わる文化人についての情報の執筆を終えた後、余白となっていた部分に、情報を追補したのではないかと指摘したが、自伝的部分は当初からの意図通りの配列であるかもしれない。追補は、乾三三丁表から乾末尾までの春日家三代の人物と、坤一八丁表から坤末尾までの松平家や出雲大社国造家などの貴人についての情報のみと想定することもできる。

## おわりに

『雲陽人物誌』坤にみられる花叔の自伝的部分を分析し、本書における意義についての考察を試みた。もちろん一義的には、五十歳を迎えた春に、旅に明け暮れ、諸国の俳人たちと華やかな交遊を重ねたこ

れまでの生活を断念したことを契機にして、自身の生涯を振り返り、書き残したいという欲求が表れていることは言うまでもない。だが、他の人物情報に比べて異例の長さを持つこうした部分をわざわざ本書に書き記すという営為からは、『雲陽人物誌』自体の成立に関わる並々ならぬ思いを読み取ることが可能である。

比布智神社から島根県立図書館に寄託された資料は、「比布智神社文書」として一五三〇点所蔵保管されている。このうち、本稿末尾に示すように、『雲陽人物誌』以外にも、「椎の本」「花叔」「橘隠」などの印や署名があり、花叔が書写、もしくは所蔵していたと考えられる文献が存する。

この中には、Cの部分に言及された『俗記 橘隠独行記』『癸亥記行』などの花叔自身の著作も含まれるし、『雲陽人物誌』編纂の参考として使用されたと思しき先行する人名録関係の資料もみられる。また、自伝的部分②でふれた囲碁関係のものをはじめ、書状・文書類、小謡や和歌・古典籍など、資料の内容は多岐にわたる。「出雲文化圏」の実態解明に向けて、今後も椎の本花叔を中心とした資料収集・分析を継続していきたい。

## 〔比布智神社文書〕花叔関係文献

### a 人名録関係

693 江戸當時 諸家人名録

表紙見返し・刊記「椎の本」印

695 名家書画墨跡誌 文化十三



表紙「椎の本秘録」

711 近世崎人傳拔書 天明八・六

表紙「椎の本」

957 誹家人名録拔書二

表紙「椎の本」

987 日本詩選作者姓名録拔書

表紙「椎の本」

1002996 誹諧名家録

表紙見返し「花叔」

隠士録

表紙「橘隠花叔」

b 花叔の著作

160 俗記 橘隠独行記

橘隠花叔

161 癸亥記行 上・中・下

橘隠花叔

930 椎之本発句集 天

c 書状・文書

171 〔書状〕 椎のものと花叔

172 〔金三朱集方一件二付書状〕

二三日 花叔

285 〔書状〕□月五日

江戸白猿 花叔宛

854-13-1① 宗門證状之事 享和二

〔春日猪之助逗留之処帰国二付〕

854-13-1② 住居證状之事 享和二・八

d 囲碁関係

732 〔碁野譜〕 文政三

裏表紙見返し「春日己千」

734 文化打碁集 一

表紙見返し「花叔写之」

742 〔包紙〕(雲陽囲碁見立角力)

包裹書「初―橘隠選」

e その他

701 祝言小謡 寛政三

裏表紙見返し「春日盈重」

708 徒然草拔書 表紙「橘隠」

710 華實年浪草拔書 表紙「椎の本」

714 本朝食鑑拔書 表紙「椎の本」

716 椎之本 草花録 天

936 古歌備忘一 表紙「橘隠花叔」

※通し番号は、島根県立図書館作成『比布智神社文書目録』に拠る。

〔注〕

(1) 山崎真克編『椎の本花叔編』雲陽人物誌「翻刻」(私家版 平成26・3)

(2) 『雲陽人物誌』「49白鹿」52黄園」「55春信」57楚川」の場合のように、「血縁関係」による一群が見受けられる。また、133「雄」から163「敬止」まで「國府之儒官」「國府之家臣(家士)」「松府之家臣」などとして松江藩士が列挙されるなど、「身分」によってまとめて配列された群も存する。

椎の本花叔編『雲陽人物誌』にみられる自伝的部分の意義(山崎真克)

なお、人物の通し番号は、島根県立図書館蔵本の掲出順に拠る。

- (3) 引用は島根県立図書館蔵本を底本とした注(1)前掲書による。私意により、適宜句読点を補った。なお、本文中にみられる抹消・見せ消ち・重書は、以下のような記号を用いて示した。

・抹消：——●○／

・見せ消ち：々

・重書：〔■〕△△

〔(■)〕の上に「△△」と重書される

〔付記〕本稿は、第二十四回古典研究会(平成二十三年三月 愛媛大学)における口頭発表の一部を基に成稿した。資料の閲覧をご許可下さった関係各位、貴重なご意見を賜った先生方に感謝申し上げます。なお本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」(二〇一三～一五年度、代表 野本瑠美)、平成二六～二八年度科学研究費「出雲文化圏における椎の本花叔の文芸事蹟と交流実態に関する研究」(26370257)による研究成果の一部である。

# The significance of the autobiography-like part seen by “Unyojinbutsushi” of Shiinomoto Kasyuku edit

YAMAZAKI Masakatsu

(Hijiyama University Faculty of Contemporary Culture Associate Professor)

## [Abstract]

The significance of the autobiography-like part which is seen by "Unyojinbutsushi" of Shiinomoto Kasyuku edit to which a reprint was issued as a private edition was considered. Autobiography-like parts are the contents which show that the desire which would like to note down own steps was a big factor of this note formation at the same time as it's equivalent to an epilogue of this whole note.

Keyword : Izumo cultural sphere, Shiinomoto Kasyuku, “Unyojinbutsushi”, The Izumo world of tanka poets, database